

伝統工芸

琴(福山琴)

福山市は全国琴生産の7割を占める。歴史は古く、水野勝成が福山城を築いたころに始まる。歴代藩主が奨励したため城下町では歌謡、音曲が盛んに行われた。幕末から明治にかけて、優れた琴の演奏者も誕生。正月の

美しい音色は、
福山琴ならではの。
削りの工程が大事。

定番メロディ「春の海」は、箏曲家・宮城道雄が鞆の浦をイメージしてつくったといわれる。最高級の桐材を使う福山琴は、優れた音色、甲の木目の美しさ、装飾の華麗さが特徴。桐材の乾燥までに1年。その後の工程は今もほとんど手作業。「つつひとつ木は違う。どういふ削りにするのか感覚で行います」と藤田さん。熟練の技が、またひとつ美しい音色の琴を仕上げている。



伝統工芸士 藤田 房彦さん

分業生産が進む中、すべての工程を一人で手作りできる貴重な職人。この道50年のベテランだ。「琴の魅力はやはり音色。工程の中では、削りが大事」という。

「ものづくり」のまちの伝統

古くからものづくりが盛んな福山市。その歴史と伝統は今も職人たちの手に引き継がれている。

下駄職人 井田 陽三さん

1955年(昭和30年)から下駄作りを始め、職人歴53年になる井田さん。「下駄は履いてもらってなんぼ!」と笑顔で言い下駄を見詰めるその瞳からは、下駄への深い愛情が伝わってくる。



下駄(松永下駄)

カランコロンと鳴らして、履いてもらってなんぼ。

松永で下駄作りが始まったのは明治時代初期。製塩業が栄えていた当時、塩を煮詰める薪を使って下駄を作ったのが始まり。その後、「安い大衆の下駄」として広く全国に知れ渡り、機械化による大量生産で1955年(昭和30年)のピーク時には、松永で年間5,600万足の生産を誇っていた。現在も、日本産下駄の約6割を占めている。

井田さんは下駄の魅力についてこう語る。「下駄ほど日本の風土に合った履物はないですよ。夏は涼しく、冬は暖かい。だからこそ履いてもらってなんぼなんです。それにね、あのカランコロンって鳴る二枚歯の音は、松永独特のものなんです。松永の下駄のこだわりですね。」

下駄を好きな人が下駄を作り続ける。その思いが現在まで下駄作りを支えている。

畳表

い草を見る目と技が畳表の品質につながる。

660年の歴史がある「びんご畳表」の職人、廣川さんが2007年度(平成19年度)、農林水産祭で内閣総理大臣賞を受賞された。い草の栽培から、畳表の生産まで行い、手織りの時代に発明された短い草を両方から織る中継ぎ表が、京都御所の迎賓館に送られた。「時間が経つと、良い品質の畳はきれいに焼けます」と語る廣川さんを支える、奥様の温かいこころも、畳表に織り込まれている。



畳表職人 廣川 宏志さん

「最適な気候と粘土質な土地が、良いい草を育てます。選別する目も大事です」畳表を生産して40年。廣川さんのやさしい笑顔の中に、畳表に対しての情熱が光る。



備後絨

備後絨は日本のこころを表現するアートだ。



備後絨は日本三大絨のひとつであり、戦後には年間300万反も生産されていた。1853年(嘉永6年) 芦田出身の富田久三郎が伊予絨に工夫を加えて生み出した井桁模様が特徴。澁谷さんは、「絨はアート。ドットが雪であり、田んぼであり、星である。藍色も日本独特で、微量の黄と緑と黒が入っている。ぜひ柄の浦で着物を着て歩いて欲しいですね」と語ってくれた。



備後絨職人 澁谷 勝彦さん

30年以上備後絨を生産されている澁谷さん。「本来の絨は、森羅万象、花鳥風月が表現されている。備後絨を通して、日本人のこころを伝えたい」と語る。

